

Title	歴史地理(三十九巻、四十巻)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.123(283)- 124(284)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大正十一年度雑誌主要論文 書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ぬ。夫故大和に大勢力がある。そして支那の遺物が澤山發見されたとしても、是を以て直ちに耶馬臺は大和であるといふ結論にはならない。耶馬臺の地點は適確にはわからぬ。もし強ひて求めるならば、肥後ならばその北部筑後ならば南部であらうと思ふ。」と論ぜられて居る。

以上記述せる處は本年中に於ける耶馬臺國の位置に關する諸説の概要に過ぎないが、同説を大別する時は大和説九州説の二説であるが、大和説は大和の何處なるかを指適せず、九州説も亦其位置不明である。然し兩説共に對陣の形勢で何れとも勝敗は決せぬが、猶本問題は研究を重ねられ益々接戦せらるゝ事と思はる。

次に右の外自分の一讀して參考となりたるもの、一二を擧げれば、和鏡聚英正續等の編ある、廣瀨都巽氏の「和鏡に就て」(二月三月、五月、六月)と題して氏の多年の研究の結果和鏡の形式等よりこれを種々分類して説明を加へられ、又「紀年鏡に就きて」と題して(八月、十月、十二月)其鏡面の刻銘墨書或は伴出の紀年の銘文ある經筒寫經等を基礎として其の鑄作年代を研究せられたるものにして、共に參考となる處少くない。

又高橋健自氏の「銅銚銅劍考」(九月、十月、十一月、十二月)は前回の續篇にして其の發見地の年々歳々増加し行くを書き集めたるものであり、猶朝鮮出土のもの並に其伴出遺物等につきて記述せられており有益の記事である。

猶後藤守一氏の對馬雜見録(八月、十一月)並に「東北地方に於ける奈良時代の一墳墓」(十二月)は面白く一讀した。

要するに本誌は同學研究機關雜誌としては唯一のもので毎號有

益の研究或は報告等を記載し且つ鮮明なる圖版を加へられ我が「史學」も大いに同誌に學ぶべきであると思ふ。

猶序に附記して置くが同會は本年四月二三兩日の休日を利用して鹿島神宮に研究旅行をなし、一行二十餘名盛なるものであつた又五月二十一日には第二十七回總會と共に美術學校に於て會員家藏展覽會を開催し、會員御自慢の珍品が集つた。又同會よりは考古圖集等を引き續き刊行せられ學界に貢獻する處記す迄も無い。

歴史地理 (三十九卷、四十卷)

會て「史學雜誌」と肩を並べたる「歴史地理」は前者の専門的なるに反して後者の通俗的なる爲め共に相下らず學界研究雜誌として賞讀せられたものであつた。

然るに最近五六年來史學の研究急に盛となり、これが著述出版年々歳々増加するに至り、大正五年一月より京大に於て東大の「史學雜誌」に對して「史林」季刊せられしを振出として、相次いで「歴史地理」に對して「歴史と地理」の刊行を見るに至り、猶其後國史講習會よりは「中央史壇」を刊行する等、其の研究雜誌兩後の竹子の如く學會にあらはるゝに至つた事は讀者一般の承知せらるゝ事と思ふ。(我が「史學」も昨年學界に生れ、此等諸誌のお仲間入りをした譯である。)

さて數十年來の歴史を有する「歴史地理」は是等新興の諸雜誌に壓せられたるか、この二三年間一向振はず恰も「夕眠」の期にあるが如く思はれ、多年會員たる自分は常にふがいなく感ぜられるが

來る大正十二年の新春と共に冬眠より醒め再び活動期に入る事と期待して居る。

次に大正十一年度に於ける本誌の記事につきては特筆すべきものは少くないが、たゞ自分として甚だ面白く讀みたるもの、二三を掲げて見ると、

先づ喜田博士の「教行信證に關する疑問に就いて」(八月、九月)である。これは自分のみならず讀者諸君の全部が興味を以て精讀せられたるものと思はれる。これは記する迄もなく東大史料編纂掛の辻博士との論争で、要するに辻博士の著「親鸞聖人筆跡の研究」に就て親鸞の眞筆なりと斷言せられたる淺草の報恩寺所傳の「教行信證」等が喜田博士の史實の研究に據りて同人の眞筆としては信ぜられないといふのである。これに對して辻博士は「史學雜誌」に於て喜田博士に答へられて居る。又最近圖書寮の編修宮本

多辰次郎氏は「中央史壇」に於て右の教行信證に就いて高説を述べられて居り、本年度の學界唯一の興味ある史論であり、今後も猶論争が續くかも知れぬ。右の教行信證に對して本願寺側の學僧は勿論他宗の學僧の方々も其の各自の研究を發表せらるゝ事を希望するのである。次に阿部愿氏の「江戸地勢考」は前年の續きであるが、殆んど毎號連載せられ猶未完であるが、自分は面白く一讀した。

次に參謀本部に於て朝鮮役戰史の編纂に従事せられて居る伴三千雄氏の「文祿慶長役數次の軍議」(七月—十月)は朝鮮役の研究に興味を有する自分には參考となつた處が少く無い。序に記して置くが自分は先年來これまで餘り人の注意せぬ對馬側の史料により

て同役を研究して居るが、近き内に發表する考であるから讀者の御批評を前以て願つて置く。

次に農商務省の農政課に勤務せらるゝ小林左衛門氏の「信州伊那の被官百姓」は農政に關して興味を有する方々に一讀をすすめらる。

年末多忙の爲め再度通讀するの餘暇の無いため、たゞ面白く一讀したものの、中二三題目を記した迄である。

猶附記して置くが同學會にては本年度に於て數回小研究旅行をしたが、これは甚だ有益の企であるが、其の旅行に關する詳細なる記事を雜誌に掲げられぬは如何なる譯か、今後は其の記事を必ず掲げられる事を幹部の方に願つて置く。(大正十一月十二月卅日夜 以上二項武田勝藏)

歴史と地理 (九卷、十卷)

雜誌「歴史と地理」は昨年度に於て第九卷第十卷合せて十二冊を發行した。同誌は普通教育に従事せらるゝ人士に對し十全なる教授資料を提供するを以て大體の目的とする事恰も英國に於て發行せらるゝ *the Geographical Magazine* と相近く、史學及び地理學を研究し且つ、進んで其の研究の普及を計る爲め(一)講演並に講習會の開催(二)調査並に踏査と相並んで(三)雜誌發行を會の根本事業として今より五年前創立せる史學地理學同攷會の普及機關雜誌である。然るに同會は日に月に發展して、少くとも京都、大阪、神戸方面に於ては唯一の有力なる民衆教化の中心となり、雜誌編輯は毎月發行にて